

保育学生の「保健・健康」への意識を高め、保健・健康指導を工夫するための考察

— 保育者への「保健・健康」に関するアンケート調査より —

七木田 方 美*¹・湯 原 富 子*²

1. はじめに

現代の保育所・幼稚園における保育者の業務は、幅広い年齢の保育に加え、早朝から夜遅くまでの保育を担うようになってきた。また、一時保育、健康を害した子どもなども対象となり、保育所では乳幼児の保健に関する問題が山積みである。このような縦横無尽な保育の広がり、本来、家庭において担うべきであった保育の内容までを、保育者が担う結果となり、未熟性を抱えた子どもの様々な生活のシーンに対応する力が保育者に求められるようになってきたということである¹⁾。そして、子どもの直接的な業務以外にも、保護者の支援および指導をも保育者が担うこととなり、保育者自身が心身の健康を維持できず、保育者の休職率は毎年増加する一方である。

集団の場での保育は、低年齢児の心身の健康にとってはどうかといえば、早期からの様々なウイルスや細菌への接触は、疾病状態を常に繰り返すこととなり、子どもの心身の発達への影響が危惧されると共に、中耳炎による後遺障害や保育所における音環境の劣悪さは、健やかな子どもの発達を補償するとは言い難い²⁾³⁾。また、特定の人とのかかわりの中で、人への基本的な信頼感を形成することが重要とされる未満児においては、保育者の勤務上、同一保育者が同一の乳児にかかわることは期待しがたい⁴⁾。

以上のように、保育業務の広がり、子どもにとっても保育者にとっても、双方の健康を維持し難い結果を招いているという現状をふまえ、今回は、今後保育を担う保育学生の保健・健康の意識を高める取り組みを検討することを目的に、保育現場で働く保育者の保健・健康に対する意識調査を行った。

2. 保育学生の「保健・健康」への意識を高めることが必要と感じたアンケート

(1) 調査方法等

- ・対象：広島県内の保育者150名
- ・期間：平成17年 7月～9月
- ・方法：調査用紙にて5段階で回答
- ・回収方法：返信用封筒にて回収
- ・109名（回収率72.7%）

(2) アンケート項目 (Fig. 1)

(3) 保育者の子どもへの保健・健康指導に関する結果 (Fig. 2)

どの項目も、「どちらともいえない」から「あまりおもしろくない」「全くそう思わない」という保育者が半数以上を占めていた。これは「保健・健康」指導は、家庭で実施されるべき「しつけ」の要素を含むものであり、決して子どもにとって「楽しい」ものにはなりがたい要素を含んでいるからではないかと推測する。

① 保育内容「健康」の生活に係わる分野について子どもが興味関心を持てるよう工夫しているか (Fig. 3)。

② 保育者は自分の身体を大切にしているかどうか (Fig. 4)。

自分の身体を大切にしていると答えた保育者は「全くそう思う」「そう思う」を合わせると12名 (11.0%) であった。

③ 保育者は健康か? (Fig. 5)

保育者自身が自分は「健康である」と答えた者は10名 (9.2%) であり、これも、圧倒的に「健康ではない」と感じている保育者が7割以上を占めた。

*¹ 幼児教育科, *² 東広島サムエル保育園

「保健・健康に関する」アンケート

I プライベート
 () 年齢 () 年代(前半・後半) () 籍地() 年

II 「保健・健康」に関して5段階でお答え下さい。

1. 全くそう思う 2. そう思う 3. どちらでもない
 4. そう思わない 5. 全く思わない

- 学生時代に学んだ保育内容「健康」はどちらかといえば遊び・運動に関するものであった。()
- 学生時代に学んだ保育内容「健康」は保育現場で有効である。()
- 保育内容「健康」の食事・排泄・休息・衣服の調節などの生活に関わる部分について、子どもが興味関心を持つような工夫をしている。()
- 保育内容「健康」の遊びや運動に関わる部分について、子どもが興味関心を持つような工夫をしている。()
- 「食事」に関する指導は、好きである。()
- 「排泄」に関する指導は、好きである。()
- 「休息」に関する指導は、好きである。()
- 「衣服の調節」に関する指導は、好きである。()
- 「自分の体に興味を持つ」という内容に関する指導は、好きである。()
- 「自分を知り、自他を大切にすること」に関する指導は、好きである。()
- 「身体の清潔」に関する指導は、好きである。()
- 「遊び・運動」に関する指導は、好きである。()
- 食事・排泄・休息・衣服の調節といった内容は、保護者が優先して行うべきである。()
- 食事・排泄・休息・衣服の調節といった内容について、保護者とよく連携がとれている。()
- 保育内容「健康」の生活に関しては、子どもの自主性に任せるべきである。()
- 保育内容「健康」の「遊び・運動」に関しては、子どもの自主性に任せるべきである。()
- 私(保育前は、幼)いときから心身共に健康である。()
- 現在、私(保育前)は健康です。()
- 私(保育前は、規則正しい)生活をしている。()
- 私(保育前)は、自分の身体を大切にしている。()

III 5領域および保育内容における保健・健康の位置づけを図式化して下さい。

Fig. 1 保育者へのアンケート用紙

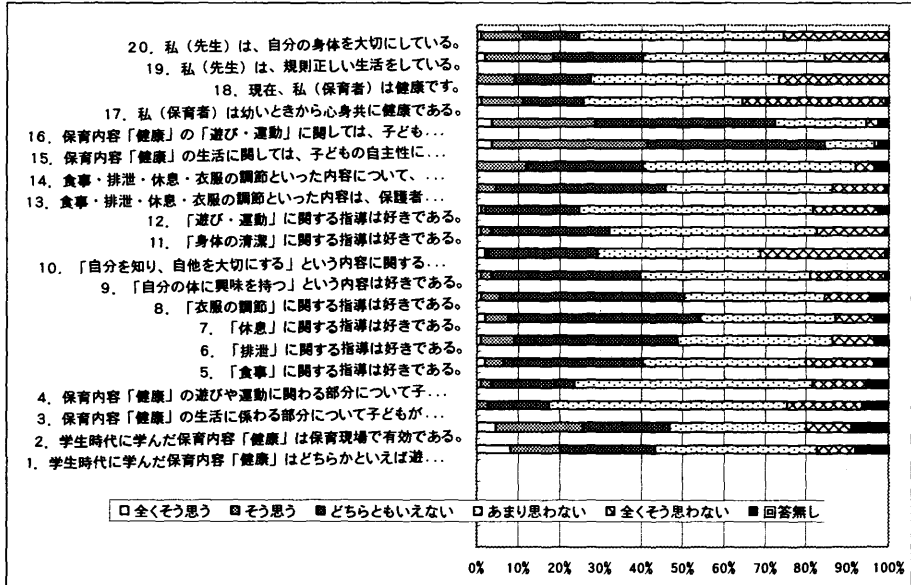


Fig. 2 保育者の「保健・健康」に対する意識のアンケート集計

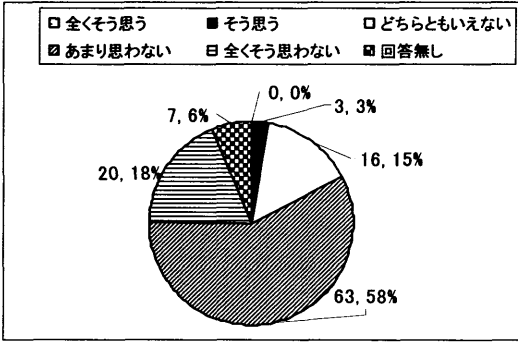


Fig. 3 保育内容「健康」の生活に係わる部分について子どもが興味関心を持てるよう工夫している。

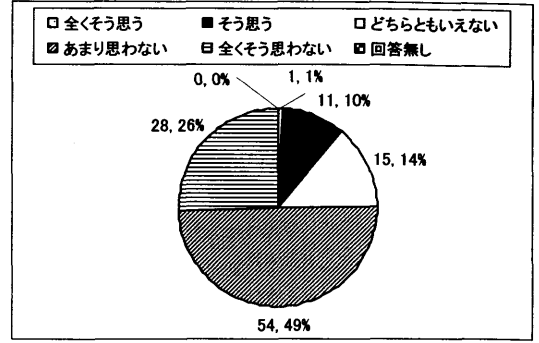


Fig. 4 私(保育者)は、自分の身体を大切にしている。

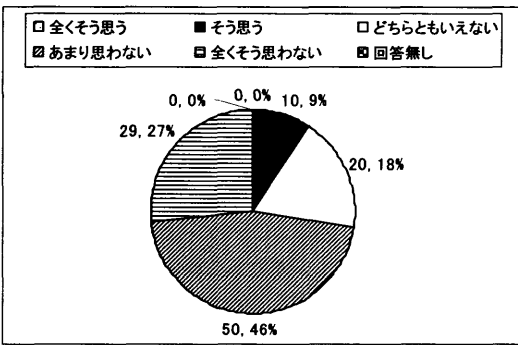


Fig. 5 現在、私(保育者)は健康です。

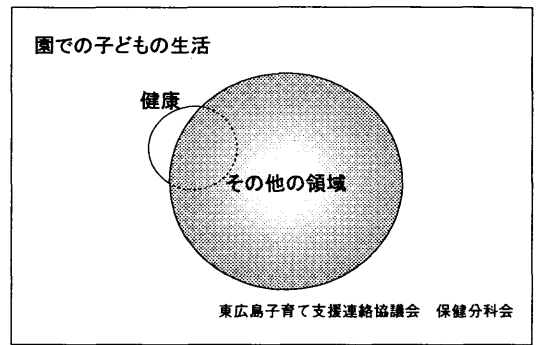


Fig. 6 保育者の「保健・健康」の位置づけ

3. 保育における「保健・健康」の位置づけについて

- ① 保育者の「保健・健康」に関する意識の図式化
「健康」という領域の位置づけについて、保育者に図式化していただき、保育者にその理由について尋ねた (Fig. 6) 保育者は、「健康」は大切に、確かに存在はしているが、日常の保育の中では見えていない部分であるという認識であり、保育所・幼稚園における活動においては、病気やけがの時は意識するが、日常的にはあまり顕在化していないということである。

- ② 看護師の「保健・健康」の位置づけの図式化
保育所・幼稚園に置いて、どの園に置いても常在ではないが、子どもの「保健・健康」を担う看護職「健康」という領域の位置づけについて、看護職の回答をFig. 7に示した。看護師は、園での子どもの生活は健康が基盤となっており、健康が傾くと、保育全体が傾くという意識を持っているという説明があった。

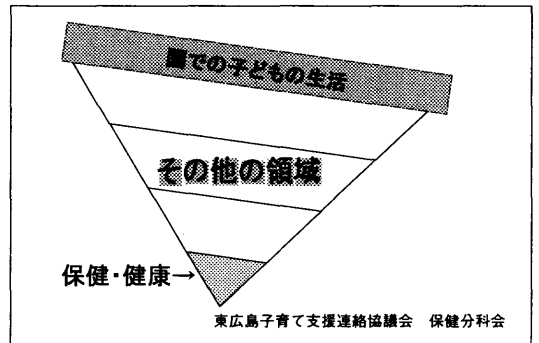


Fig. 7 看護師の「保健・健康」の位置づけ

4. アンケート調査および「保健・健康」の位置づけに関する考察

- (1) 保育者の資質としての「保健・健康」
 - ① 子どもへの「保健・健康」の指導・援助は苦手
保健・健康に関する指導・援助は苦手で、日常の繰り返しの中で自然に取り入れる内容であり、具体的に興味関心を持てるような工夫はさ

れていないということが推測される。

② 保育者自身の健康の維持管理が困難

保育者が自らの心身の健康について、十分に配慮していないことが今回のアンケートにて明らかとなったが、これは、業務過多な状況にあわせ、自分の心身への深い洞察が疎かにされてきたところにも一端があるのではないかと考える。三砂は、現代日本という文化における女性の生き方への警笛をならしており、女性性をそのまま生きることを大切にすることを述べている⁵⁾。また、保育者や保育学生の多くは女性であり、女性は男性に比べうつ病になりやすい性差があることを考えると、20歳代女性の精神的な様々な異常は、自分の体に向き合うことをうまく重ねていくことで、重症に至る前に気づき、回避できる事も可能ではないかと考える⁶⁾。

③ 保育職としての「健康・保健」への意識と看護職の意識の違いを生み出すものについて

保育職と看護職という職種により、「保健・健康」に関する意識の有り様が図式化することにより視覚的に理解できたことは、保育者養成において乳幼児の心身の健康を育む者にとっては、示唆に富むものであると考える。

ここで考えたいのは、両者とも「保健・健康」を意識しているが、どちらが正解かということではなく、保育者と看護職における違いを生み出す違いである。

保育者は、「子どもを抱き、語りかけ、遊ぶこと」が本来の業務であることを考えると、子どもがのびのびと主体的に遊ぶための環境を整え、また自らも環境構成の一員として、言葉をかけ、音楽を奏で、子ども一人一人の願いをくみ取る作業と子ども同士の願いの調節について、子どもに共感し応答する力を根本的に持っている存在である。そして、子どもの生活を丸ごと預かる保育者になるため、保育学生は保育者養成という明確なねらいのある場で、様々な保育技術を習得している。

一方、看護師養成の場に置いては、人の命の尊さや儚さについて思慮を重ねることは避けては通れないことである。看護師は、保育士、子ども達の健康に視点を置いて関わっているのである。保育を創り出すというよりは、健康を基にして心身が育まれるという意識で保育に関わっているのである。そして、保育者へ望む事は、子どもの鏡と

なる保育者が健康でなければ、いい保育は出来ないということ、すなわち、保育者の健康観をも大切にしてほしいということである。

保育職と看護職の違いを生み出す違いとは、個々の個人レベルの資質や経験の異なりはもちろんであるが、養成時期における双方の学びの特異性も大きな要因である。しかしながら保育学生が、ゆとりのない多忙な時間に、自分の軸および根源といった、生きることの原点としての個や、その時の心身の有り様を十分に内観しているかどうかは疑問が残る。保育において、「人の命を預かる」という土台は決しておろそかにはできないことであり、土台なくしての「子どもとの楽しい生活」は、いずれ崩壊するという事を、養成者は認識する必要があるように思われる。

七木田は、「保護者のエンパワーメント」について保育者養成者としての自身の課題として、「親は、一人の人間として、自分という時間を充実して生きてこそ親としても充実して生きられるのだと考える。親のエンパワーメントとは、支援する者がその親を、親である前に一人の人間であるという事を認めてはじめて可能なものであり、知識による環境や行動レベルでの支援にとどまらず、信念レベルからの支援があってこそ実現する」とまとめている⁷⁾。この言葉は、保育者においても保育学生においても同様であり、「保育者も保育者である前にひとりの人間としても充実して生きてこそ保育者として充実して生きられる」と置き換えることができる。

様々な職種が連携する場である保育現場において、保育者は人数的にも業務的にも優位であるからこそ、他職種への心くばりのあるコミュニケーション能力の構築が求められる。よりよい連携および保育者の「保健・健康」の意識の顕在化のためにも、保育者である前に一人の人間として、自分の心身を十分に内観するだけの材料とゆとりを保育学生に提供する必要性を感じる。

(2) 乳幼児期の「保健・健康」指導のあり方の考察

① 「ねばならぬ」から「気づく」へ

「保健・健康」という領域は、領域の特性上、ねばならぬ性格が強く、また「しつけ」的な要素を含むものである。たとえば、「手洗い」については、保育者という大人にとっては、「感染症防止のため」もしくは「身体の清潔のため」に洗わなくてはならないものである。一方、子どもにし

てみれば、なぜ手を洗うのか意味が分からないまま「洗わせられている」という感が強いように思える。保育者が「手は汚い」「バイキンがついている」といくら言葉で言ったとしても、子どもは、どんなにトイレのノブを回したとしても、ジャングルジムを必死になって登ったとしても、手の汚れ、そしてバイキンは見えるはずがないのである。そこで、保育者は言葉によって目に見えぬ汚れた状況を子どもに説明しようとするが、個々の子どもが言葉の内容をどのように受け取るかを考えぬまま、ただ「手にバイキンが付いているから洗いましょう」「お腹が痛くなるよ」などと「諭」を用いてその汚さを表現したとしても、子どもにとってそれが現実になる瞬間はよほどのこと（例えばニオイとして残っていた）が無い限り皆無に等しい。また、「きたない」「あらいなさい」「そのままではいけません」といった命令や禁止は、言葉の特性として否定的感情が付きまとい、子どもは、話の内容はさておき、まずはその言葉に拒否を見せる。

したがって、「ねばならぬ」から「気づく」ための教材開発は、「保健・健康」という領域においては不可欠なものであり、アルバートメラビンの提唱するメラビンの法則のとおり、視覚や聴覚等の感覚に訴えるような工夫が望まれる⁸⁾。

② 「自分を知り、自他に興味を持つ」という内容について

乳児期は自他の意識が未分化であり、他者への意識が芽生える時期である。浜田が述べるように、自分を知るということは、他者がいて、そこに自分を重ね合わせてはじめて行われることであり、自他の相互性があって初めて自我が芽生えるものである⁹⁾。やがて幼児期前期から

後期への移行期は、いわゆる「こころの理論」が成立し、ハンフリーの言う「内なる目」による自分への報償や自制といった感情が芽生えるようになる時期である¹⁰⁾。

乳幼児期は、あらゆる現象に対して、自分というものを照らし合わせ、自分は他の人とは違う考えを持つ個性ある人間なのだということに気づく時期であり、この時期における「保健・健康」のあり方は、子どもが自分自身の心身の有り様に気づき、自分も他人も大切にすることを育てることが大切になる。

③ 子どもにかかわる全ての人による保健・健康指導に関する認識の必要性

生活の便利さとは裏腹に、子どもの子どものらしい姿を奪うような科学技術や環境の進展により、乳幼児の遊びや生活の質は決して向上したとは言えない。また、体力や生活技能の低下、基本的な人との関係の未熟さによる、気がかりな子どもは増えていく一方であり、ビデオやゲーム漬けにされた子どもの慢性疲労や睡眠異常は、基本的な生活習慣を脅かすばかりでなく、正常な精神機能の発達や、こころの理論の不成立を招くことは、もはや保健学では常識である¹¹⁾。

子どもは、自然の中で経験を積み重ね、五感をひらきながら育っていくということが懐かしく思える現代社会において、前述のメラビンの法則に従うような視覚や聴覚に限らず、幼児期においては五感に意識的に働きかけることが、子どもの健やかな心身の発達のために不可欠であると考える (Fig. 8)。湯原は、保育所・園における保健・健康指導は子どもにかかわる者全てでくり返し行うことの必要性を強調するように、保健・健康指導はその場や特定の人に限ら

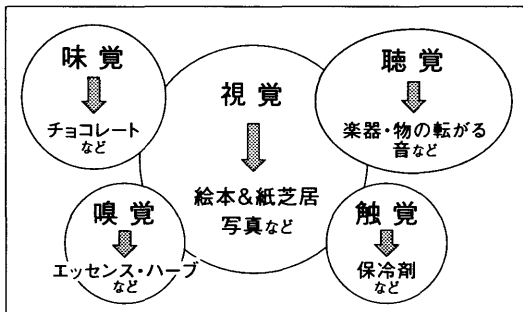


Fig. 8 五感を刺激する教材の工夫

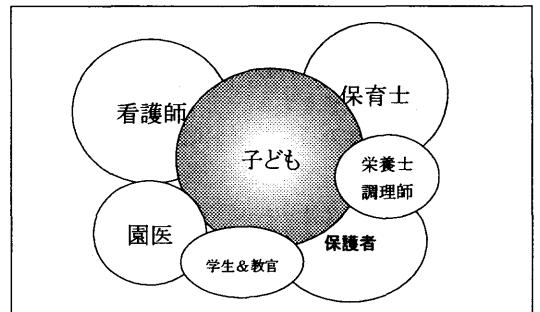


Fig. 9 みんなで繰り返しの保健指導

ず、全ての場面で子どもにかかわる全ての人が協力して実施できるようになることが筆者らの願いである (Fig. 9)¹²⁾。

④ 五感をひらくために

乳児期のケアのなかに「自分の心身を知る」という内容があることを保育者は意識し、子どもが五感を十分にひらけるようなかかわりが必要である。タッチケアなどの積極的なスキンシップは、五感をひらき、乳児の人への基本的な信頼感を育てる上では有効であると考え¹³⁾。

幼児期は、乳児期に十分にひらかれた五感により能動的に外の世界に働きかけながら、他者への懐の深さを、この後一生磨いていけるよう、保育基盤作りのための働きかけを、言葉に限らず意識して行っていく必要があると考える。

未熟で未分化であった五感を幼児期に十分にひらき、気づいた子ども達が、他者との関わりの中で他者との違いに気づき、やがて自分も他人も認められる豊かさをもった一人の人間として成長していくことを期待したい。もちろん、保育者となる保育学生についても筆者自身も同様である。

保育者の休職が過去最高になっている現在、保育者が子どもの健康の保持増進のみならず、自らの心身の健康を保持する能力も保育力のひとつと考えていく必要があると考える。子どもの五感をひらく教材の開発は、保育学生にとっては保育力を磨くことそのものであろう。

5. まとめと今後の課題

アンケート調査により、保育者自身の「保健・健康」への意識の低さと指導の苦しさ明らかとなった。保育学生の「保健・健康」への意識を高め、乳幼児期の保健・健康指導の工夫点は以下の3点である。

- ① 保育者自身の保健・健康を維持するために、保育学生には、保育者である前に一人の人間として、自分の心身を十分に内観するだけの材料とゆとりを提供する必要がある。
 - ② 保健・健康指導は「ねばならぬ」的性格が強いため、子どもの「気づき」を導くような乳児期からの積み重ねと工夫が必要である。
 - ③ 心身の健全な発達には、乳児期には五感をひらき、幼児期には能動的に五感で気づけるような援助が必要である。
- そして、学生が自らの問題として「気づき」を得、そし

て行動化につながるような機会を積極的に与えていき、保育学生の保育力を高めることが今後の課題である。

引用・参考文献

- 1) 巷野悟郎「子どもの健康を考える」 pp. 3-5, 2003
- 2) 古川侃「保育園児の呼吸器感染と中耳炎」第12回日本保育園保健学会抄録集 P18. 2006
- 3) 「欧米に比べ騒がしい日本の保育室」産経新聞 2003. 1. 28
- 4) 保育所保育指針 第13章「保育所における子育て支援及び職員の研修」
- 5) 三砂ちづる「オニパパ化する女たち」光文社新書
- 6) E.レイベンス「女性がうつ病になりやすい理由」日経サイエンス 脳と心のミステリー心はなぜ病むのか
- 7) 七木田方美「乳幼児をもつ親のエンパワーメントに関する取り組みについて」比治山大学短期大学部紀要 第41号 PP. 31-40.
- 8) 竹内一郎「人は見た目が9割」新潮社新書 pp. 18-20, 2005
- 9) 浜田寿美男「身体から表象へ」ミネルヴァ書房 PP. 61-111, 2002
- 10) 榎原洋一「アスペルガー障害と学習障害」講談社αブックス pp. 91-99, 2002
- 11) 田澤雄作 日本小児保健シリーズ「不定愁訴を持つ子どもたちへのアプローチ」日本小児保健協会編 2005
- 12) 湯原富子 七木田方美「保健指導を保育活動にうまく組み入れるための工夫」第12回保育所保健学会抄録集 p61. 2006
- 13) 七木田方美「深めましょう、0歳からのことばをこえた親子の絆」Touch Care Update Vol. 7, No.2 日本タッチケア研究会ニューズレター 2006
- 14) 七木田方美「子どもへの教材開発による保育学生の『保健・健康』に関する意識の変容」全国保育士養成協議会第45回大会研究発表論文集 pp.98-99, 2006

〈謝 辞〉

稿を終えるに当たり、研究に快くご協力頂きました広島県内の保育所・幼稚園の先生方、および東広島子育て支援連絡協議会の関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。

(受理 平成18年10月6日)

Abstract

The Consideration to Raise Consciousness of the Health of Child-Care Student and to Devise Health Guidance

— From a Questionnaire-based Investigation about the Health of the Child-Care Worker —

Masami NANAKIDA*¹, Tomiko YUHARA*²

Research showed that child-care workers weren't conscious of their health. Then, it become clear that she was poor at overall health guidance. The health consciousness of the child-care student is also raised, and ideas for the health guidance of child's term are then discussed.

Findings in this research include:

- ① It is important that the child-care worker maintains their health. Before a child-care worker that must be provided a chance to become aware of their mind and body as one human being, and time to comprehend that.
- ② The health guidance has the character of "You should be it". An experience from the suckling term which draws the child's awareness among their ideas are also necessary.
- ③ Child-care workers must become aware of the five senses in infancy, and it is necessary for the child to use the five senses actively for the healthy development.

(Received October 6, 2006)

*¹ Department of Early Childhood Education, *² Higashi Hiroshima Samuel Nursery School